

ふるさとを知り、
ふるさとを愛そう

農の詩人

坂本文学が語るふるさと

加東市横谷の旧家の傍らに、郷土の詩人を称える詩碑がひっそりと建っています。
その詩人の名は「坂本遼」。
ふるさとの言葉、播州地方の方言で詩情豊かに綴った詩集「たん

ぼぼ」が発刊されて、今年で八十年になります。唯一の詩集を通して文学史に確かな足跡を刻んだ郷土の偉人の言葉、文学から、私たちのふるさとづくりへのメッセージを探ってみたいと思います。



春

おかんはたつた一人
峠田のてつぺんで鍬にもたれ
大きな空に
小ちやいからだを
びよつくり浮かして
空いつぱいになく雲雀の声を
ざつと聞いてゐるやろで

里の方で牛がないたら
ざつと余韻に耳をかたむけてゐるやろで
大きい 美しい
春がまはつてくるたんびに
おかんの年がよるのが
目に見へるやうで かなしい
おかんがみたい

「詩集たんぼぼ」より

年譜

- 一九〇四 加東郡上東条村横谷に、父芳太郎(明治37年) 母みつの長男として生まれる。父は教育者で、辺地教育に私財を投じて情熱を注ぎ、家庭を顧みることができなくなり、代わって母が一家のきりもりをし農作業に励んだ。
- 一九一八 上東条尋常高等小学校高等科を卒業後、県立小野中学校に入学。
- 一九二二 関西学院文学部英文科に入学。同級生に詩人の竹中郁がいた。
- 一九二五 詩話会編集「日本詩人」第二新詩人号(新潮社)に「お鶴の死と俺」が入選。
- 一九二七 詩集『たんぼぼ』(序文・草野心平、銅鑼社)、小説集『百姓の話』を刊行。
- 一九三二 朝日新聞大阪本社に入社。兵役を挟み、一九五九年の定年まで勤務し、論説委員などを務める。
- 一九四八 子どもの作文と詩を育てる児童詩雑誌「きりん」(尾崎書房)の編集に参加。竹中郁が詩の選に、坂本が作文の選にあたる。
- 一九五九 『きょうも生きて』(東都書房)を出版。
- 昭和34年
- 一九六〇 『きょうも生きて』が一九六〇年度児童福祉文化賞・サンケイ児童出版文化賞を受賞。同時に、日本児童文学者協会等の推薦図書に選ばれる。
- 昭和45年
- 一九七〇 心臓卒中のため死去(享年六十五)
- 昭和46年
- 一九七二 第一回たんぼぼ忌で、詩碑「春」が除幕される。
- 昭和51年
- 一九七六 第六回たんぼぼ忌で、草野心平書による「傑れた農の詩人 坂本遼の碑」が除幕。
- 二〇〇四 生誕百年記念事業「たんぼぼ祭」(平成16年) が開催される。



坂本遼という人

みなさまは、坂本遼という詩人をご存知でしょうか。
坂本遼は、明治三十七年に、今の加東市横谷(当時の上東条村)で生まれ育った加東市出身の詩人です。
上の年譜にあるように、地元の尋常小学校、中学校を卒業後、郷里を離れて、神戸で暮らしながらも郷土を思い、母を愛し、その思いを播磨地方の方言で綴った詩が高い評価を受け、その作品は小学校の国語の教科書にも採用されました。
また、父がかつて校長を務めた東条東小学校、東条西小学校の校歌の作詞を手がけるなど、生涯ふるさとを愛し、見つめ続けた人でした。

ふるさとから愛された人

坂本遼の作品には、彼の愛した母親が「おかん」という方言で記されています。
母への思い、母が暮らすふるさとへの思いを、私たちのふるさとという言葉で綴る作品は、大正から昭和初期にかけて、貧しい農村の暮らしの中で、大地に根ざして生きる農民の素朴で美しい心の目を通して描かれており、彼は「農民詩人」と呼ばれ、他の多くの詩人に評価され、また影響を与えました。
唯一の詩集『たんぼぼ』発刊後は、詩を書くことはあまりなくなりましたが、児童詩雑誌「きりん」の編集に携わる中でも、子ども達から寄せられる詩や作文の選考において、純粋な心、優しい気持ちを変換することなく持ち続けた人であったと言われています。

そして、彼の美しく豊かな人間性を証明するかのように、彼の没後、彼を慕う詩人や地域の人々が生家の詩碑前に集う「たんぼぼ忌」が二十六回催され、東条東・西小学校の児童が、彼の作詞した校歌を歌いました。また、生誕百年にあたる平成十六年には、有志の実行委員会により、「たんぼぼ祭」が盛大に開かれました。
ふるさとを愛した坂本遼は、ふるさとで愛された人でもあったのです。